

**2173年8月15日、日本  
エリー**

## 午前の会議

---

午前の会議は行き詰っていた。

区長であるわたしは、迷っていた。すべきことは分かっている。希望者をすべて受け入れることである。しかし、それをすれば混乱が生じるだろう。

信念を貫いて受け入れるか。

生活を守って拒むか。

洋行先生が生きていたら、なんといっただろう。ここに先生がいたら……先生に会いたい。そうだ、会って話をしよう。

「昼には葬儀がある。結論は午後の会議で出そう。各自決断しておいてほしい。わたしも自分の意見を決めておく」

わたしは年老いてすっかり動きの鈍くなった体を引きずり、困惑した代表者たちの顔が並ぶ会議室を出た。

## 共同墓地へ

---

青々と茂った田んぼのあぜ道を、水の入ったバケツを持って、行きつ戻りつ、わたしは一人きりで共同墓地へ向かった。

共同墓地には、洋行先生を含め、この村で亡くなった村人全員が一つの墓で眠っている。

保護区の暮らしは厳しく、やるべきことが多い。故人を個別に悼む余裕がなかったため、山境に共同墓地を設け、8月に合同葬儀することになった。

保護区が作られた当初、特定の宗教を持ち込むことははばかられたため、葬儀も村人の手作りで始まった。

初めての葬儀ではみんな黙って祈りを捧げていたようだ。しかし、無音ではいかにも華がなく、咳ばらいが突拍子もなく響くのだった。そこで翌年、仲間の一人がネットで手ごろな歌を探して、みんなで歌うことにした。ところが、いざ一斉に歌い出すと、真面目に歌わねばと思えば思うほど緊張に耐えられず、笑いがこみあげてきた。そうしてクスクス笑いは次第にワハハワハの大合唱となり、最後まで歌いきることはできなかった。

練習もなしにいざ本番というのも難しく、歌があるのはいいけど自分が歌うのはちょっとという声も多く上がった。そこで数年を経て、歌のうまいものを選んで代表で歌ってもらうという話になった。そして葬儀の前日にのど自慢を集めてコンテストが開かれることとなった。

地区によっては世襲というところも、外からプロの歌手を迎えるところもあるが、わたしの村ではコンテストが葬儀前の祭りの一環となり、毎年優勝者がその年の葬儀歌手として歌うこととなった。いろいろ変わったことも多いが、この伝統だけはいまだに守られており、葬儀歌手はのど自慢憧れの名称となっている。今年も、昨日の優勝者が、今日の昼の葬儀で歌うことになっていた。

## 墓掃除

---

共同墓地といっても、柵もなく、ただ村に豊富にある木材で作られた塔が建っているだけだった。塔は1メートルほどの高さで、1辺が3メートルほどの四角い小さな箱で、骨を納めるため、内部は空洞になっている。葬儀の際には、周りを人が囲み、葬儀歌手の歌を聞きながら、故人へ祈りを捧げる。

わたしは青空の下、汗をポタポタたらしながら草むしりを始めた。わたし以外にも、墓掃除を日課としているものが多いため、墓の周りに新しく芽を出した雑草がチヨロチヨロと生えている程度だった。すぐに抜き終わると、真新しいタオルを取り出し、バケツの水で濡らして、木製の塔の汚れをこすり落とし始めた。すると先生のことを思い起こされた。

洋行先生は、わたしが生まれ育った村である、最初の保護区を作った人で、保護区の父と呼ばれている。先生が26歳の時に、13歳から15歳の子どもを寮に入れて、工場勤務をさせるという制度が作られた際には、工場で作ったものを使用する保護区の存在は確立していなかった。

一人の人が、一人の人を救うことは難しい。しかし、大勢の人が一人の人を救うことなら可能かもしれない。それが福祉の基本原理となっている。つまり、多くの人は救うだけで、救われることがない。ではもし、年老いた自分自身を救うために、それぞれが、未来へ投資したらどうなるだろう。うまくいくだろうか。

結論から言えば、日々の生活に余裕のある人は将来の蓄えも可能だが、日々の暮らしに事欠く生活の人は将来に備える余裕はない。強制的に積立金を取り立てても、やはり暮らしていくのに十分な蓄えにはならず、厳しい暮らしが待っている。

また、今困っている人を助ける代わりに、将来困ったときに助けてもらうという原則を守るためには、働く義務を全うする必要があった。義務を果たす意志のないものが制度の中に含まれれば、大勢が一人を救うという助け方はできなくなってしまう。だから、助け合いを望まないものを排除する必要が出てくる。そこで考えられたのが、集団生活で労働をして、働く意志と能力があることを証明するという寮制度だった。審査するならできるだけ若い方がいいということで、自立できるぎりぎりの年齢である13歳から15歳が選ばれた。

始まった当初は、支え合う一員として迎えるという「資格」という意味しかなかった。しかし、企業が、組織の一員として働くことができる証明と考え、提出を求めるようになると、なくてはならない資格に変わっていった。なぜなら、試した結果働く意志はあっても能力が欠けているため助ける対象とする証明でもあったからだ。

入寮は、2073年に13歳になる子どもから始まった。それ以前の世代は、入寮の代わりとなる集団生活を3年間送ることで資格を得ることができた。若い世代は、保険を掛けるつもりで参加することが多かったが、年老いた世代は今の暮らしを捨ててまで参加するものは少なかった。だから、「高齢者切り捨てで立て直した」と言われても仕方がないやり方だった。

洋行先生も、最初は反対者の一人だった。高齢者切り捨てもさることながら、個人の自由を認めないやり方に反対だったそうだ。

自由こそが最も尊いと考えた洋行先生は、協力を求めるために各地を演説してまわっていた桐

戸教授に対して、講演の最後に自由についてどう考えているか質問したそうだ。教授は、その場で答えてくれなかったが、メールアドレスを教えられて、意見交換が始まった。

初めは威勢よく非難していた洋行先生だったが、最後には意見を変えることとなった。

大勢で取り組まなければならないことを、暴力を含めた権力を駆使して、人を動かし押し進めてきた歴史がある。暴力を使わず、法律で律することに変えたとしても、やるべきことをやらなければならない事実は変わらない。しかし、支配されていたころはやるのが生きるすべだったが、支配されなくなった今はやらずに結果だけを求める方が楽である。他人が義務を果たすことを期待して、自分は自分のために自由に好きなことを選ぶ「ただ乗り」が可能になった。

「決定に参加し、意見を発表する自由であって、参加しないで自分の好きなことだけする自由は誰にもない。誰かがやらなければならない、かつ、平等に権利を有したいというなら、交代で勤めを果たしていくしかない。もちろん、義務を果たす上でどうやるかを選ぶ自由なら残されているかもしれない。しかし、代表になったからといって、思い通りになんでも動かしたなら、暴君と言われても仕方がない。結局、王様が苦勞したように、我々も苦勞しなければならない。その苦勞を分かち合う意志と能力があるかどうか確認するための寮生活であり、工場勤務なのだ。だから、誰もが参加する。もし逃げ出したのなら、のぞまないことを強制するより、勘定に入れないことを選ぶ方がお互いのためではないかね？ 集団からの排除という選択肢があってこそその自由というものではないかね？」

教授にそう問われて、洋行先生は言葉を失った。外から決定者を個人の自由を奪う敵とみなして批判するのをやめ、自らが決定者として関わる人全員が参加できる共同体を作ることを模索するようになった。

卒寮し、助け合う資格を得たものが集団で暮らす区域を作ることを思いついたのは、そのころネットでフリーで公開されていたゲームから得た着想だった。過疎地域に人を配置して、国土を保護するための小規模な組織のネットワークを作る。そのアイデアこそが保護区の始まりだった。

子供を預かることは後から始まった。いきなり寮で集団生活をするに抵抗を示す子どもが多かったため、まずは働く以前に親から離れて集団で暮らすことを目的として、出来上がったばかりの保護区に預けられることになった。将来の担い手となる人材を育てるため、保護区側が積極的に受け入れたこともあり、月日を重ねるごとに多くの子どもが7歳で保護区に入るようになった。

つまり保護区は、国土を隅々まで監視し、健全に保つために存在する。林業、農業を基本産業とし、衣食住は供給される。保護区同士で連携を図り、大部分が自給で賄える。しかし、13歳～15歳の子どもたちが工場で作ったものを使用するという役割も担っているため、あえて作らないものも多い。

一度は人が去り、荒れ果てた場所を再びよみがえらせることは大変な仕事だった。やるべきことは山のようにあった。しかし、目的を持った洋行先生は、少しも恐れなかった。むしろ嬉しくてたまらなかったそうだ。ここに自分たちの村ができる。そう思うと心が震えたという。

わたしは、最初の保護区の住人だった両親のもとに生まれた。だから生まれたとき、洋行先生

の祝福を受けたそうだ。しかし、わたし自身に記憶はない。わたしが覚えているのは、7歳で親から離れて保護区に来た子供たちと一緒に勉強や仕事をするようになった時、指導者として師弟関係を結んだところからだった。

洋行先生は、いつもニコニコしていらした。わたしたちが何を主張しようと、「それは面白そうだね」「やってみたらいいと思うよ」と受け入れてくださった。誰もが先生を好きになった。

わたしは、大人になったら洋行先生の後を継いで区長になりたいと考えていた。そんな気持ちを先生にこっそり打ち明けたところ、「区長になりたいのなら、自由区にでて競争原理を学んだ方がいいと思う。言われなくても競争できる人が集まるから、自主平等というお題目が成り立つのだから」と自由区行きをすすめられた。

洋行先生を信じ切っていたわたしは、卒寮式で言われるがままに自由区行きを宣言した。

保護区で生まれ、保護区で育ったわたしにとって、寮生活も工場勤務も違和感なく務めることができた。保護区での暮らしの延長でしかなかった。いや、むしろ選択肢が増え、楽になったといってもよかった。だから、より自由なはずの自由区にでて、金銭を得るために他人の思惑に縛られて身動きが取れなくなる暮らしは、予想外の辛さだった。

保護区では、12歳以下の子どもであっても、子どもが関わることは、自分たちで決めることができた。必ず一人ずつ意見を聞かれる。むしろ、言わないことは許されなかった。

ところが、自由区では、資金を出した人や決定権を持つ人だけが、意見を言うことができる。重大な決定は多数決で賛否を問うことがある。しかし、賛否を問うことを決定するのは、決定権を持つ人たちが決める。基本的に、一般の人々が意見を言う機会は皆無である。その疎外感は、わたしに強烈な怒りを感じさせた。虚しさを感じさせた。

自分の考えを実現したいなら、競争を勝ち抜き、出世するしかない。わたしは、頂点を目指して権力者になりたいのか。それとも、怒りのままに権力に逆らい反逆者になりたいのか。何度も何度も自問した。

結論から言えば、巨大な権力に抗うよりも、実行者として積極的に決めごとに参加した方がかっこいいと思った。しかし、自分が何に興味をもっていて、何を決めたいと願っているのか考えた結果、やりたいことは自由区にはなかった。お金を儲けるための仕事の中で決定権を持つことより、生活そのものに関わりたいと思った。だからわたしは、保護区に戻ることに決めた。

それでも自由区には3年いた。工場勤務では技術を学んだし、栄えては滅びていく店たちを見て競争原理というものを実感できたのではないかと思う。

そう、保護区にも競争原理は働いている。木材を自由区に出荷しているし、余剰分を売買することで必要なものを手に入れている。しかし、責任者が責任を持って対処しているが、得られた利益も、損失も、集団に還元される。

つまり、自分の行動の結果が、自分だけに影響を与えるわけではない。全体に影響を与える。良い影響を与えて尊敬されることもあれば、悪い結果を与えて信用を失うこともある。

誰だって良い結果を残して、良い評価をされたいと願う。しかし、そうはいかない現実がある。特に競争原理が働く場面で思い通りの結果を出すことは難しい。しかし、誰もが平等に経験し、結果を出すことが難しいことを知っているのだから、悪い結果とともに耐えていくという選択を

する。立ち直れないほど非難されることは少ない。なぜなら、個人攻撃をすれば、攻撃した側も裁かれるからだ。

保護区では伝統を重ねるほどに、習慣を大切に、和を重んじる古来の日本の姿が蘇っていた。狭い範囲で同じ顔ぶれで暮らし続けていくための知恵が復活した。

木製の塔を念入りに磨き上げ終わると、わたしは顔を上げあたりを見回した。いつごろからいたのか、知らない間にポツポツと人が集まっていた。年寄が多く、墓の手入れをしたり、一心に祈ったり、思い思いに過ごしていた。

たった一つの村から始まった保護区は、全国に広がり、人も組織も安定している。新たに開発するところはなく、大人数を受け入れれば、今までのバランスが崩れるだろう。しかし、受け入れなければ、保護区に入る資格があるにもかかわらず入れないという矛盾が起きてしまう。

卒寮すれば、誰もが保護区に戻ることができる。入りさえすれば、食べることに困らない。だから、安心して生きることができる。そう語り継がれてきたのに、拒否されたとなれば、神話が崩壊してしまう。

しかし、受け入れるとなれば、専用の小屋も作らなければならない。出荷していた木材を、小屋の製造に回すことになれば、収入は減るだろう。それでも、人手が増えるのだから、今まで手の回らなかった部分に手間をかけられるかもしれない。悪いことばかりではない。

だが、この村の出身者以外にも大勢来るらしい。自由区育ちの人もいる。この村の人間なら生活の一部として自然に行動できる模範を持たない者が入れれば、トラブルは避けられないだろう。それでも、今では意味のなくなった習慣を、客観的な目で検討するよい機会でもある。本当に悪いことばかりではないのだ。でも……。

とりとめなく思い悩み続けていると、葬儀の時間になった。葬儀歌手が、共同墓地の前に立ち、挨拶をし、歌い始めた。

澄み切った青空のように濃く高く歌声が響いた。高まり切ると一転、入道雲のようにモクモクと寂しさが沸き上がるのだった。先生に会いたい。わたしは心から再会を願った。みんなの意見を大切にしたい先生ならどうするだろう。先生なら……。

歌が終わり、区長として挨拶することとなった。

わたしは、先生のやり方を真似て、みんなに意見を問うため、挨拶代わりに話し出した。「今年もつつがなく葬儀が執り行われ、大変うれしく思っています。今年の歌も大変素晴らしかった。みなさん、それぞれ故人を思い出されたことでしょう」

拍手が沸き起こった。

「さて、事前アンケートでご存じのとおり、保護区は今、岐路に立たされております。大量の希望者を受け入れるか、受け入れないのか」

村人たちは静まり返り、蝉の鳴き声だけが響いた。

「本日午前中の会議で、みなさんの意見を聞かせていただきました。結論から申しますと、賛成と反対は同数です。その理由も納得できるものが多く、どちらに決めることもできかねています。わたし自身、大変迷っております。ですが、午後の会議までに決めなければなりません。緊急を要する希望者に対して、これ以上返事を待たせることはできません」

村人たちは、口々に話し始めた。心配するもの、歓迎するもの、避難場所として一時的に受け入れることを提案するもの、さまざまな意見がでた。一通り意見が出尽くして声が途切れたとこ



ろでわたしは話し出した。

「保護区というのは、自分たちの暮らしを自分たちで決定できる自由を手にするため、必要最低限の人数を保つ必要があります。だから、今までは余っている土地を開拓してネットワークを広げることで対応してきました。しかし今、広げる土地はありません。決まった土地からは、決まった収穫しかありませんから、人数が増えればそれだけ配分は減るわけです。労働的には、交代制で休むなど余裕がでるかもしれませんが、経済的には厳しくなるでしょう。それでも、資格を持つものを入れないというわけにはいきません。制度の根幹が揺らげば、保護区の存在意義そのものが失われてしまいます。国土や人を守ってきたように、希望者たちを仲間として受け入れる。それこそが、わたしたちが求めてきた理想ではないでしょうか。今こそ、底力を見せる時ではないでしょうか。もちろん、わたしたちが拒んでも、他の村が受け入れてくれるかもしれません。また受け入れる人数を制限することもできます。面接を行って、合う合わないを判断する権利があります。しかしわたしは、縁あってこの区を希望する人たちは、全員受け入れたいと考えています」

村人たちが一斉にざわつき始めた。「そんなことして大丈夫なのか」という声も聞こえてきた。

「わたしの提案が、どれほど苦難に満ちた道のりになるか、よく分かっています。運営に失敗するかもしれません。今までの暮らしを破壊するかもしれません。危険はあります。しかし、わたしは洋行先生の志を継ぎたいのです。生活よりも理念を取りたいのです。どうかみなさん、職を失って保護区に頼るしかない希望者たちと苦しみを分かち合ってください。この村にあるものは、分け与えましょう。彼らに安心してもらいましょう」

わたしは、深々と村人たちに頭を下げた。5秒、10秒と沈黙が続いた。蝉の鳴き声だけが鳴り響いていた。わたしは、賛同を得ることを諦めかけた。自分の暮らしを危険にさらしてまで、他人を救うことを全員に求める無理難題を思い知らされた。しかし、「俺が希望者なら最後の希望だ。受け入れてほしいもんな〜」という声とともに、一人の若者が拍手を始めた。するとそれに続く若者が数名現れた。わたしは期待に胸が震えた。しかし、拍手はそれ以上増えなかった。この状態で受け入れを強行すれば、村を二分する事態に陥ってしまうだろう。どうすればいいのか。どうすれば.....。

わたしは、とぎれとぎれしゃべり始めた。

「この村でうまれたもの。子どものころに来たもの。経緯はさまざまです。戻ってくる時期もいろいろです。しかし、村と関わりがある人物であることがほとんどです。だから、おかえりなさいと迎えることができる。離れていても、つながりを持ち続けることができる。思い出があるからです」

口々に「そうだ。その通り」などと相槌を打つ声が飛び交った。わたしは、勇気づけられて言葉をつないだ。

「しかし、関係なく来た人も若干います。彼らはこの村を愛し、受け入れ、馴染んでくれた。今ではわたしたちの仲間です。そうでしょうか？」

村人たちは拍手で賛成の意志を示してくれた。わたしは、考え考えしゃべり続けた。

「たしかに、300名の村に50名入るのだから、大問題です。住宅はもちろん、設備も備品も拡大しなければならないでしょう。そして、その数をその後維持できるのかも問題です。維持できなければ、無駄になってしまいます。ずっと今の規模に合わせて計画を立ててきましたから、このままが一番です。しかし、受け入れなくても、年老いて死ぬ者、新しく生まれるもの、変化はついてまわります。村の出身者が戻る割合も、変わらなかったのが奇跡なのです。選択の自由を与えられている以上、予想外の状況が起きる可能性は常にあります。そして、今がその時なのです。枝分かれして全国に足を広げる時期は終わり、一つ一つの村が状況に対応する時なのです。なぜなら、わたしたちの村は、所有物ではないからです。国を守り、育てるために存在しているのです。地震や台風に対処するように、不景気という敵と戦わなければならないのです。自由区は、保護区の一部であり、わたしたちの仲間なのですから」

わたしは真っ直ぐ顔を上げ、ゆっくりとあたりを見渡した。村人たちの表情からは、揺れ動く気持ちが見て取れた。不安や怖れ、いらだちの中に、同調の色が見えた。わたしは一人一人の顔を見つめ、うなずいて回った。すると彼らもうなずき返し、拍手が始まった。すべての顔を見つめ終わった時には、蝉の声をかき消すほどの大音量となっていた。

「みんなありがとう。ありがとう。心から感謝します」

深々と頭を下げ終わると、わたしも拍手の輪に加わった。

## 午後の会議

---

代表者たちの前で、わたしは受け入れ同意書にサインした。

「受け入れると決まったら、準備をしなければ。担当を決めて、計画を立てることにしよう。まずは立候補者を募ることにしよう。各自自分のグループで意見を聞いてまた明日集まってほしい。今日はこれで解散する。お疲れさまでした」

わたしは、会議室を出ていく代表者たちを見守った。そして、立候補者が現れてくれることを心から願った。